

週日の説教

金 大烈 神父 2008年12月2日(火)

《待降節、希望に満たされて待ちましょう》

待降節に入ると、教会では特によく使う言葉があります。それは「待ち望む」という言葉です。「待ち望む」というのは、望みながら待つことでしょうか、それとも待ちながら望むことでしょうか。内容的には望みながら待つことを意味します。「待ち望む」と言いますが、「待ち恐れる」とは言いませんね。恐れながら待つ、それでは大変なことになりますね。

皆様、待降節とはどういう意味ですか。イエス様がこの世に来られるのを待ち望むことですね。では、どのように待てばよいのでしょうか。恐れではなく、希望で満たされて待つことが、一番基本的な意味です。イエス様はなぜ来られるのでしょうか。皆様の前に見える十字架の死を見せるために来られるのです。あの死の姿を見たら悲しみを感じられない人はいないと思います。私たちは十字架にかけられることをよく知っているにもかかわらず、イエス様が来られることを待ち望んでいます。これがキリスト教のある意味ではパラドックス(逆説)です。

皆様、私たちは望むものが何であるか分からなければ、待ち望むことはできません。何を望むべきか、望んでいるものが何であるか、はっきり分かりながら待つとき、待つ意味が更によく分かると思います。

恐れながら待つのではなくて、本当に喜んで望みながら待つのであれば、私たちの信仰が難しさにぶつかったとしても私たちの顔には希望というものが必ず表れるはずです。私たちが希望に囲まれていなければ、死んだ信仰になってしまいます。望むと言うことは希望です。難しさがあっても希望によって、乗り越える力をいただけると思います。私たちは4週間、待降節の中を過ごします。この待降節に、自分にとって一番難しいことは何であるか、自分を妨げるものは何であるか、自分の中の何が自分を否定的に追いかけるのか、考えてそれを乗り越えられる恵みをいただければ最高の待降節になると思います。

二番目に、今日の福音(ルカ 10・21 - 24)で、「知恵のある者や賢い者にはあなたのみ旨を表さないで、幼子のような、本当に純粋な子どものような者にあなたのみ旨が表されている。それが本当に父の御心であることを私ははっきりわかっています」というイエス様の言葉が述べられています。幼い子の特徴は、任せること、頼ることです。皆様に何か否定的な傷があり、乗り越えにくい性格的な問題点があっても、「私はこういう存在です、こういう弱さを持っています。しかしあなたに全てのことを委ねたいです。」という心があれば皆様は救われます。必ず明るい道が待つと思います。

三番目に申し上げたいのは、私たちは神様を愛していますと、言いますね。みんなそれを分かっています。しかし、私は皆様にその愛をもっと具体的に感じてほしいのです。

二十歳くらいの時、恋に落ちた経験があると思います。そのとき、相手の人のことで頭がいっぱいになってしまい、何もできなくなってしまったことがあるでしょう。また、テレビのドラマを見て、素敵なタレントが出ていると、あのような人と一緒にいられたらいいのにと感じてしまうことがありますよね。そのような具体的な感覚でイエス様を感じなければならぬのです。論理的ではなく、この人は本当に私を愛しているのだ、という確信が心に生じなければ否定的なことに襲われたときにすぐに逃げてしまいます。

皆様、望んでください。あなたが私を愛するように私にもあなたを具体的に愛する気持ちをお許しください、と強く望んでみてください。そのために一番基本的なことは、心を敏感に持つことです。花はなぜ美しいのでしょうか。山の奥に登ると星が見え、それを美しいと思います。なぜ美しいと思うのでしょうか。美しさを見ようとする心があるから美しさは見られるのです。花を見ようとする心

があるから花が見られ、星を見ようとする心があるから星が見られます。よく考えてみてください。この世の中に、どのくらい美しいものがあるでしょうか。美しさに囲まれているにもかかわらず、私達は、美しさを感じられないまま死んでしまうこともあります。花はずっと昔からあるものです。星もありました。わざわざ星を見ようとして何回くらい空を見上げていたでしょうか。そういう意味で、朝早く起きたらできるだけ、まず空を見上げてください。そのように敏感に望む心があれば、この世界は心を傷つけて痛める以上に心を癒す力が豊かにある世界だという悟りが生じるのではないのでしょうか。

嫌いな人がいたとしましょう。しかし、嫌いな人の中にも美しさを見ようとする心を持てば、この世の中で一番美しい人になるのです。それが福音というものです。

ありがとうございました。